



**Data**

監督・脚本：横浜聡子  
原作：越谷オサム『いとみち』（新潮文庫刊）  
出演：駒井蓮／豊川悦司／黒川芽以  
／横田真悠／中島歩／古坂大魔王／ジョナゴールド／宇野祥平／西川洋子

### ■■■ショートコメント■■■

◆本作のチラシには「けっぱれ!」、「わぁ、三味線弾ぐ」の文字が踊っている。また、本作は、「心に染み入る日本のソウルミュージック—津軽三味線がつむぐ珠玉の人間ドラマ。祖母、父と共に三世代で暮らし、家族愛に包まれていた少女が、社会の荒波をたくましく生きる人々とふれあい、成長する—」と紹介されている。そんな本作は、越谷オサムの同名の大ベストセラー青春小説を映画化したものだ。

本作の主人公（ヒロイン）は、青森県弘前市の高校に通う高校1年生の相馬いと（駒井蓮）。祖母ハツエ（西川洋子）、父親耕一（豊川悦司）と共に暮らすといは、内気で人付き合いが苦手。その一因は、訛りがきつく、会話をするこゝ自体が苦手なためだが・・・。

◆私は横浜聡子監督作品をこれまで観たことないが、チラシには、「オール青森ロケ。鬼才横浜聡子監督が『市井の人々』を描いた最高傑作」と書かれている。“鬼才”と書かれているのだから、園子温監督や韓国の故キム・ギドク監督のような鋭い問題提起が特徴！もちろん、そんな監督は脚本も自身で書いているはずだから、その問題提起に期待！

チラシに映るメイド姿に三味線という主人公の変わったスタイルも面白そうだが、こりゃ映画も必見！そう思ったが・・・。

◆本作のクライマックスは、きっとヒロインいとがメイド服姿で弾く三味線のライブ。したがって、映画としては、いとがメイド喫茶でアルバイトを始める人生模索模様とともに、ライブに至るまでの血の滲むような三味線の稽古風景が描かれるはずだ。

ちなみに、陳凱歌（チェン・カイコー）監督の『北京ヴァイオリン』（02年）は、出生の秘密とそれに伴う父子愛をバックにしながゝ、13歳のチェン少年が弾く“チャイ・コン”ことチャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲が狂巻で感動的だった（『シネマ5』299頁）。すると、本作も、それと同じように・・・？

そう思っていたが、スローテンポで進む本作には、いとが祖母から三味線を習うシーク

エンスはいつまで待っても登場しない。いとの亡くなった母親は、相当な弾き手だったそうだが、さて、いとの腕前は？

◆私は喫茶店は好きだが、メイド珈琲店には1度も行ったことがない。そもそも、あんな店に行く客は、何を求めているの？それについて、私は、ある時、ある事情でいとと“対決”した父親が娘にぶちまける言葉と同感だ。

故郷Uターン組の店長、工藤優一郎（中島歩）も、シングルマザーメイドの葛西幸子（黒川芽以）も、さらに、漫画家志望の若いメイド福士智美（横田真悠）も、みんな面白いキャラだが、そもそも津軽の、あんなビルの、あんな場所にあるメイド珈琲店の経営が成り立つの？

コロナ禍では真っ先につぶれるはずだが、本作ではオーナーの成田太郎（古坂大魔王）が某犯罪で逮捕されてしまったから、店の存続は到底ムリ！だらだら続くエピソードの末に、そんな結末が待ち受けていたが・・・。

◆原作小説がどんな展開でいとのライブ公演のクライマックスに至るのかは知らないが、本作後半では、つぶれかけたメイド珈琲店の再建築として、いとの三味線ライブが企画されていくのがストーリーの核になる。しかし、1人のメイドの三味線ライブだけで観客を集め、メイド珈琲店を再建することが可能なの？

それを考えただけでも本作の（脚本の）非現実性は明らかだが、スクリーン上は粛々とそんなストーリーが展開していく。しかし、そこでもいとの三味線の練習風景は登場しないから、アレレ・・・。

しかして、本作のクライマックスに見る、いとの三味線演奏は？この程度の映画なら、116分の長編ではなく、20～30分の短編で十分なのでは？

2021（令和3）年7月7日記